

中央情報通信

発行日 毎月15日

大日本生産党機関紙

第1343号 平成29年9月15日

9、10月合併号

	中国人に喰い荒らされる国民健康保険	本紙編集部..... 1
報告	「竹島」と、愛する国日本	大日本生産党 党首 丹野寛親..... 2
寄稿	韓国「徴用工」はマスコミの誘導だと気付いた文大統領 「兵庫通信」代表 村上 学..... 5	
	「聖」と「俗」について考える	6
	おすすめ映画「ウォーナーの謎のリスト」	9
	本部・地方本部活動報告	9

本 社 〒157-0065 東京都世田谷区上祖師谷 2-5-24-103
電話・FAX (03)5313-0215
賛助購読料 年額 3,000円（年10回発行）
ホームページ [http:// 大日本生産党.com/](http://大日本生産党.com/)

発 行 所
中 央 情 報 通 信 社
主幹・編集長／谷 田 透

※次号は11月15日発行の予定です

中国人に喰い荒らされる国民健康保険

本紙編集部

鄧小平が「能力のある者から海外へ行って金儲けしてこい」と命令して、銭ゲバの中国人を大量にパスポート取得させて送り出した一九七〇年代から、これら新華僑は世界の災厄と呼ばれるようになった。

我が国にも、一九九〇年代をピークとして中国人は公安部発行のパスポートで送り出されており、それらが永住・帰化した後の二〇一〇年代に第二ピークを迎えた中国人の波は、日本人が必死で守ってきた国民保険制度を喰い荒らしにかかっている。

二〇一二年七月、民主党政権は外国人が日本の国民健康保険に簡単に加入できる法律を作った。外国人登録法を廃止し、「在留カード」だけで長期滞在が可能としたのである。つまり「入管難民法」にある「三ヶ月以上の在留資格」とは、留学や就業による三ヶ月間の在留許可の「原則ビザ」を持つ者であり、それらが居住する自治体の市役所市民課窓口で「在留カード」をもらい、保健課窓口で国民保険に加入できるようにしたのである。

一年以上の合法滞在者でなければ「住民」にもなれず、まして「国保加入者」になれるはずもなかった法律を、民主党はぶち壊して、特に中国人を優遇するように改悪したのである。

中国人留学生に多いのが、専門学校で資格を取るとの建前で来日し、アパートに数人で合宿し、水商売で働きながら結婚相手の日本人を探し、市役所には住民登録して在留カードを入手して国保加入する。留学生だから月額保険料は一千円程度しか払わず、保険証は似ている年恰好の中国人同士で使い回し、あらゆる種類の病院や医院に



かかって薬を大量に手に入れる。ひと通り誰かの保険証を使い終わると、今度は別の誰かの保険証で同じ事を繰り返す。つまり、国保保険料は一度しか払わない。病院や医院では、保険証の中国人が患者本人かどうかの判別は不可能であり、また、保険診療なら病院や医院の腹は痛まないもので、レセプトさえセンターに送れば診療費も薬品代ももらえるため、中国人の踏み倒しに神経質になる必要がない。

最近の中国人の間で注目されているビジネスが、日本の最新式診断と超高額医薬品を使う「癌治療」を、観光旅行とセットにした「日本ツアー」の紹介である。これまでの同様のツアーは、中国人の金持ちや中国共産党幹部が客だったので「現金で全額支払う」という安心感がまだあった。しかし今回のツアーでは、日本国内に投資会社を設立しておき、基本財産を日本の銀行に預金して見せ金と保証金を「信用詐欺」の道具にして、その中国人従業員という名目で来日させ、癌治療を受けさせるのである。国民保険では「限度額証明」の制度があり、いくら治療費がかかっても三万数千円程度の支払で済むのである。これの悪用を考えているとは、さすがに中国人は怖い。中国人の国民病である肝炎についても、一回の免疫療法で数十万円かかる新薬治療も、医療費助成制度の対象として申請すれば患者負担は「収入に応じて」という裏技が使える。

現状の日本の医療費総額は年間四〇兆円だが、中国人が大規模に日本の国民保険を悪用する手口を使い始めれば、一気に一〇兆円の大打撃に乗るかもしれない。一刻も早い対策が必要である。

「竹島」と、愛する日本へ」

大日本生産党 党首 丹野 寛 親

世界情勢が緊迫する中、とりわけ北朝鮮の弾道ミサイルによる恫喝外交は我が国の防衛に対して大きな脅威となり、もはや専守防衛等というような事態ではない。それどころか国内の日本共産党や連合反戦団体は、「話し合いによる平和的解決」を唱え「今こそ日本国憲法を守ろう」と国内各地域に於いて叫びまくっている。戦後体制の「反戦教育」が祖国、家族、愛する人という精神面全てをないがしろにし、自己中心的な日本人をかくも多く作り上げたのだ。

町ゆく若者達や中高年層の日本人は、今そこに迫りくる危機・国難に対して無関心であり、無防備極まりない様相を呈している。今回は、そうした視点から「愛する国とは、領土とは、竹島問題とは」を、国難迫る事態を念頭に述べていきたいと思う。



我が国は法と対話による平和的な解決を望んでいる。これは外務省が「竹島の領有権に関する我が国の立場と韓国による不法占拠の概要」と題して、外務省アジア大洋州局北東アジア課が発行しているQ&Aの小冊子の文言である。不当に占領したとは言わず「不法に占拠した」と、ご丁寧な言い回しであるが、抑々こうした外交姿勢を採ること自体が固有領土を奪われる要因であり、腰の引けた言葉を通じて使うべきではない。

このたび、我々は本年六月十日より二十日まで島根県松江市へ出向き、島根県議会運営委員会と島根県竹島問題対策室の方々へ聞き取り調査を行った。

この調査に際しては、島根県庁関係者の皆様に心から御礼申し上げる。



以下、時系列で竹島関連の年表出来事を考えて行きたい。西暦一九〇四年（明治三十七年）中井養三郎が「こやりん島」（現在の竹島）の領土編入と貸し下げを出願し、翌年（明治三十八年）に日本政府が閣議で「竹島」と命名して、領土編入並びに隠岐島司の所管を決定した。同年、島根県知事が「島根県告示第

四〇号」により、竹島の地名と所管を公示した。一九四五年（昭和二十年）大東亜戦争終結後の一九五一年（昭和二十六年）韓国政府が米国政府に対し、対日平和条約の中で竹島を韓国領とするよう要望したが、米国政府はその要望を拒否した。これが所謂、「ラスク書簡」である。

同年「サンフランシスコ平和条約」調印。朝鮮の放棄を規定して、竹島の日本保持が確定した。ところが韓国・李承晩大統領が一方的に「李承晩ライン」（写真）を設けて竹島の領有を主張した。日本政府は韓国政府に対し「李承晩ライン」と竹島領有主張に抗議したが、この時の政府と外務省の弱腰こそが今も続く不当占領を確定させたと言える。後にサンフランシスコ平和条約が発効されるが、一九五三年（昭和二十八年）島根県と海上保安庁が共同で竹島を調査、領土標識を設置した。しかし、韓国政府が李承晩ライン内からの日本漁船の退去を命じ、多くの拿捕を強行開始した。

この時、日本政府が防衛出動を決定して断固たる領土保全に対応していれば、現在のような竹島問題は発生していない。敗戦後に戦う意欲も領土を死守する責任も放棄してしまい、韓国のような小国にさえ土下座外交をして平和的な解決をなどと外交基本路線を逸脱したが、固有領土への侵略を既成事実化させてしまった根本的原因である。

その失態は、現在の尖閣諸島に於ける中国の領海侵犯や、沖縄普天間基地問題で日本人が自国の防衛どころか、侵略行為に対しても平和的な解決をスローガンにして何でも反対運動となり、該当地域以外でも日本人に紛れて反日工作を繰り返す日朝鮮人や中国人が



官邸周辺まで押しかけて反日工作運動を行うような為体（ていたらく）に今や陥っている。これは外敵企業に買い取られたマスコミ放送も、日本国主権の保持ではなく反日工作勢力を正当化したような報道を繰り返すありさまで、画像をよく見ると何も思想のない純粹な日本人を陰から擁護しながら、日本人の如く加担している数が大半を占めている。政府当局側も、それを見て見ぬふりで反日勢力はやりたい放題の始末である。

話が少しズレたので元に戻ろう。先に述べたように「李承晩ライン」を主張したとき（昭和二十七年）が竹島を日本の固有領土であることを証明できた時期であった。その後の日本政府と外務省の対応は次の通りである。

まず国を愛する島根県民として対応策を講じたのは一九六二年（昭和三十一年）島根県議会である。本会議が「竹島の領土権確保に関する決議」を可決した。政府は昭和二十七年に韓国政府に竹島領有主張に抗議はしているが、それ以外に目立った行動はしていなかった。あるとすれば一九六五年（昭和四十年）「日韓基本関係条約」「日韓漁業協定」「紛争解決に関する交換公文」の調印・発行ぐらいである。後にこれらは全て歴代の韓国政府によって反故にされた条約ばかりである。



次に島根県議会が一九七七年（昭和五十二年）「竹島の領土権の確保並びに周辺漁場の安全確保に関する要望決議」を可決した。この時期は、竹島の扱いを一該当県の問題として政府が対応をし始めた頃と言っても過言ではない。昭和二十八年以降は海上保安庁が島根県と合同で標柱を建てたが、韓国は日本の巡視船に幾度も発砲を繰り返していた為、政府が紛争を恐れて応戦させなかったことが、その後の韓国の侵略行為を助長させてしまった。

そればかりか韓国は、竹島に灯台を設置して海洋警察隊を上陸させ監視を開始した。ま

た、先に述べたように「日韓漁業協定」が結ばれ「李承晩ライン」が消滅したにも関わらず現在に至るまで、ヘリポートの建設、警察隊員の宿舎、埠頭の建設を強行してきた。ここまでされても日本政府は、今現在も「法と対話による平和的な解決」を何故望むのか理解できない。韓国は「従軍慰安婦補償問題」でも幾度も不当に我が国から補償金を搾取しておきながら、国対国では解決しても民間では未解決である：などとうそぶいて詐欺師の如く要求を繰り返す。その補償金は全て日本国民の血税から支払ったものである。

では戦前一九三五年（昭和十年）頃の島根県漁師が、竹島のアシカ捕獲と干しアワビ漁でどのくらいの収支決算があったかご存知だろうか。当時の一円を五千元として計算すると、アシカ捕獲二十九頭四、〇六〇円すなわち現在価値で二、〇三〇万円。干しアワビは明確な数量は不明だが記録によると八〇〇円すなわち現在価値で四〇〇万円となる。漁の期間は、竹島に渡り漁夫・海女十三人で五十日であるから、現在にあっても莫大な収益である。

これをみすみす放棄する国と国民など、世界を見ても日本以外に存在しないであろう。韓国や中国が海賊の如く侵略行為を止めないはずである。昨今の日本人は国を愛する心を放棄してしまったような人々が、ひと際目立っていると思われる。今回はタイトルに「竹島と、愛する国日本」と命題しているが、素朴に今の日本社会の中で国会議員・都道府県知事・市町村長・各省庁国家公務員・地方公務員・大手企業・中小企業・農業・漁業従事者・自営業者・一般国民などを見ると、どれだけの者が「国を愛する思い」を公の場で公言しているか考えてみて欲しいと思う。

言える者を探すのは難しく、言わない者を見るのは日常茶飯事ではないか。全くもって理解しがたい現実を目の当たりにする。「愛国」と言えば軍国主義・国粋主義、しまいには戦争犯罪者・謝罪・反省・補償金と：、全世界の中で七十二年前の所謂「戦争責任」を、世代も違う民に対して問われ、幾度もここまです謝罪・反省・補償金を払えと言われ続ける民族は日本人だけであろう。

さて前述したように竹島の海産物や海洋資源等の事を考えると、政府や外務省の外交姿

勢では永久に権利行使はできない。海洋資源に対する海洋調査を行ったのは二〇〇六年（平成十八年）に海上保安庁が竹島周辺で海洋調査を行うとしたとき、韓国はこれを実力で阻止するため、警備艦艇を非常配備し固守した。この当時の内閣総理大臣は小泉純一郎から第一次安倍晋三内閣へと移行する時であるから、日本政府もこの時期を逃がすべきではなかった。二〇〇一年（平成十三年）に重武装した北朝鮮の不審船問題では戦後初めて海上保安庁が発砲して応戦していたので、韓国も話し合いで衝突を避けようとしていたのは明白である。

この当時の状況で一步も引かず応戦していれば、その後の韓国は一方的に「総合海洋科学基地」の建設計画や海洋資源調査を出来ずにいたはずだ。「国連海洋法条約」では各国の排他的経済水域「二〇〇海里」の水産資源・海底資源に対しては権利と同時に、資源保護や海洋汚染防止に責任をもつとある。我が国と韓国では、竹島問題が未解決のため排他的経済水域の境界線がなく、一九九九年（平成十一年）に発効した日韓漁業協定では、どちらのものとも決めない「暫定水域」を設定し合意した。

ところが韓国は、これも見事に反故にして日韓が共同管理する取り決めも一方的に破り日本漁船を武力で強制的に撤退させて、竹島周辺十二海里には一切近付けさせないよう実力行使し続けている。しかし日本海西部には石油や天然ガスなどの海底資源があり、海洋資源を確保するためにも竹島は断固として我が国の固有領土であることを実力行使で示さなければならぬ。政府がやらないなら「我々国民が行動する時期がきた」と考えようではないか。方法論は多種多様なものがあり躊躇する必要は一切なく、どんなことをやるかは、追々述べるとして現在、国がどのような動きをしているか説明して行こう。

不当に占領された竹島を直視すると、我が国の政府のように抗議をしたところで韓国が立ち去る訳はない。政府（内閣官房）が領土・主権をめぐる国内啓発の強化を図るため全国教育委員会指導主事等を対象とした「領土・主権に関する教育セミナー」の開催や竹島関連資料を紹介する「竹島ポータルサイト」を

公開したが、どれほどの国民や若い層に認知されているか現状を推察すれば、研究者と島根県議会と島根県民くらいではなからうか。

外務省は「竹島問題一〇のポイント」の発行や日本の領土をめぐる情勢について、国際社会への情報発信を強化してホームページ上で十二カ国語による情報発信をしている。これも外務省のお決まりの対応策であり、北方領土・竹島：と失地に対して国際社会に地道に訴えたところで、何処の国も助けてはくれない。

国際司法裁判所（ICJ）所在地はオランダのハーグ）に関しては、一九五三年（昭和二十八年）イギリスとフランスがイギリス海峡のマンキエ・エクレオ諸島をめぐる争った裁判では、イギリスがこの島々に



島根県松江市での聴き取り調査

直接行政権を行使していた事が決め手になり、イギリスが勝訴しているが、竹島とは事情が違う。それでも我が国政府は、韓国に対して一九五四年（昭和二十九年）・一九六二年（昭和三十七年）及び二〇一二年（平成二十四年）の三回、竹島問題を国際司法裁判所へ提訴すべく提案したが、当然韓国は「日韓に領土問題は存在しない」として拒否した。

それが先に述べたように「法と対話による平和的な解決を望んでいます」へと繋がる平和ボケした外務省の対応策であるから、次元が低いばかりか呆れて議論にもならない。もっと厳しく言うなら霞が関の外務省に掲げる表看板に、韓国外務省兼アジア大洋州局北東アジア課出張所とでも書いておけばよいではないかと吐き捨てたくなる。今回の竹島問題に関する島根県への調査活動は、進めるほど日本政府と該当省庁の縦割り感覚が浮き彫りとなり、今回調査論文を書く上で、どう伝えていくのか多くの参考資料を頂き苦慮するところである。



今号一回ではお伝えしきれないので連載とし、次号は十一月号へ続けます。

寄稿 韓国「徴用工」はマスコミの誘導だと気づいた文大統領

「兵庫通信」代表 村上 学

韓国「慰安婦」の問題は、国民心理的に「許しても忘れてはいけない」のだと、筆者の知人の韓国外交官は言う。理由は、韓国が弱ければ同じことが再び起こることと、それを阻止できなかった国民的な反省を忘れてはならないことと、日本軍部の支配が暴走するのを日本政府が座視していた過去が繰り返されないようにするために有効だからと、彼は説明する。その論法には確かに一理あるかもしれない。だが最近の慰安婦少女像をバスに乗せたりする反日運動に至っては、韓国の瞬間湯沸かし器的な国民性と大衆迎合型の韓国政府方針を悪用した左翼マスコミの「戦術」だと断定できる。これは、日本・韓国双方の国民感情に「ヘイト」を植え付けたい連中の高等戦術だと言える。

昨年から九州筑豊炭鉱地域で本格的に策動が始まっていた「韓国人炭鉱徴用工」の問題は、現地（福岡県）における日韓双方の世話人たちの努力により、この問題を過剰に宣伝して「日本悪者説」を定着させようとしていた在日と日本人極左活動家たちを黙らせることで一応は収束していた。

すると同じ極左グループが、中国共産党と朝鮮労働党の工作部門の支援を受けて韓国（主としてソウル、釜山）で国民扇動をやり始めた。結託する左翼マスコミも全面的に協力し、大統領まで動かし始めていた。

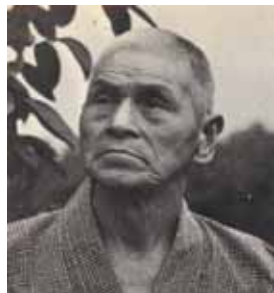
文大統領が記者会見で国内左翼マスコミの論調に従うコメントを出し、日本国民や日本政府を激怒させていたのは記憶に新しい。しかし数週間後、表向きは北朝鮮の挑発に対して日本と協力するためとしながらも、文大統領は「徴用工」から距離を置き始めた。

くだんの韓国外交官から、日本における朝鮮人炭鉱労働者の歴史的事実を教えて欲しいと言われたのは、ちょうどその時期だった。筆者は運良く、福岡県における朝鮮人炭鉱労働者の歴史に詳しい人物と親しい関係だったので、筆者の知る限りの情報を韓国外交官に与え、「文大統領はこのままでは国際的に恥をかく」と警告しておいた。その情報が上層

部に届いたようで、文大統領は恥をかかずに済みそうだ。



簡単に炭鉱における朝鮮人労働者の話をすると、当時の朝鮮では身分差別は徹底的で、被差別や貧困の身分からは決して一般人にならない。しかし筑豊炭鉱に行けば、国籍や民族とは無関係に「掘ったら掘っただけ金になる」社会が存在した。賃金のランクは、日本人・朝鮮人・支那人の順番だった。朝鮮人は被差別者が国を脱出して筑豊炭鉱に働きにきた者が多く、それらは炭鉱会社の名簿に虚偽の住所や氏名を書いた。だから不慮の落盤事故などで死亡しても、連絡先が不明なので「無縁仏」とされた者が多い。生き残った大半の朝鮮人炭鉱労働者は、戦後も筑豊に定住した者が多く、それは当時の労働者が両班や常民ではない「被差別貧困民」ばかりだったからである。



ユネスコ世界遺産になった山本兵衛

支那人炭鉱労働者は困った存在で、支那官方から刑務所に入っていた連中を労働者として日本に売り渡した者が大半だったのである。それを炭鉱会社が安い値段で奴隷として買い取って働かせたが、反乱を起こしたり脱走したりして困らせた。だから、支那人炭鉱労働者と朝鮮人炭鉱労働者とは別の話として考えた方がよいのである。

韓国左翼マスコミが主張していたのが、長崎県の軍艦島（写真次頁）での朝鮮人炭鉱労働者の実態が悲惨だったというフィクションだったのだが、これを文大統領と側近は中共・北朝鮮・左翼マスコミに言われるまま信用し、日本政府と三菱本社に抗議すると息巻いていたのである。

この件についても韓国外交官には事実の説明をしたが、運良く筆者は数年前に軍艦島に行つて少し調べた経験があったのである。

戦前・戦後を通じて軍艦島は三菱の象徴的な炭鉱であり、そこで働く者（ピーク時には五千人）は他の炭鉱より給料が上で、島には娯楽施設も病院も完備されており、「九州本土にあって軍艦島に無いものは焼き場と墓地だけ」と言われていたのであった。当時映画などは、福岡博多の映画館で上映される前に軍艦島の映画館で上映されたほどだ。

海底炭鉱は精神的に異常をきたす者が多かったようで、大規模な島の病院施設の裏側には、精神異常者専用隔離棟があった。



三井はすでに韓国に屈服しているので、今度は三菱を屈服させて賠償金を巻き上げようという極左グループの企画が「軍艦島朝鮮人炭鉱労働者弾圧説」を扇動デマとして生み出したようだ。

筑豊炭鉱などでは十数社の炭鉱会社が「国籍も民族も問わず、部落か一般かも問わず」に労働者を管理していたのである。今では少なくなったが、「炭鉱住宅」は四軒が向かい

「聖」と「俗」について考える

むすびの集ひ事務局

「聖なるもの」については、時代背景や宗教的立場によって対象物は大きく変わるが、それが「神」に結び付けられる観念であることが多い。

神や仏というものの自体、歴史的に見て民との距離や温度に大きな違いがある。

「俗なるもの」の場合、低俗や卑俗という言葉があるように、民の悪心や最下層を指して見下す意味合いがあるだろう。誰が見下すのか？聖なるものの側からの視点であろう。

では、聖なるものの側にいる者たちは聖なのか？そこにこそ、「聖」と「俗」の考え方の基軸があるのではないだろうか。

時間的・人物的に捉える前に、場所的に「聖」と「俗」を考えてみると、「聖なる場所」は人間の営みを容易に許さない（人間を拒絶する）所だと仮定した場合、それは山ということになる。外部の里や村からは山の中を見通せず、そこに何者がいるかは確かめられな

合った長屋で、間の通路に便所が二箇所作られていた。これが筑豊各地にあった。炭鉱労働者は日銭でたっぷり稼ぐので、飲み食いは派手だったが、貯金して家を建てるなどの考えは少なかったらしい。

炭鉱労働とは、一般人が考えている何倍も苛酷である。軍艦島の給料は公務員の三倍と言われた時期もあるが、筑豊でも良い金になるのと裏腹に「いつ死ぬかわからない」という危険と共にあった。「普通の人」が働く職場ではなかったことは明らかである。しかし、差別は少なく（掟は厳格なものが存在したが）金になるなら、頼みの綱として炭鉱に行く者も多かったと考えられる。

もし、韓国大統領が「日本政府は韓国人徴用工を炭鉱で動物扱いして虐待した」などと国際的にアピールしたなら、筑豊や軍艦島での朝鮮人炭鉱労働者の実態や歴史的事実が全て表面化（公開）することになる。

筑豊炭鉱の実態を記録画で残した山本作兵衛はユネスコ世界遺産になっている。韓国大統領がそれを知らなかったのも驚きだが、賢明な韓国外交官が韓国政府が道を誤るのを救ったことは嬉しいことである。

いだろう。この山にも千差万別あり、急峻で森が深く、山頂付近においても清水が湧き出している「修験道」の山が対象となる。そんな山を指して、特別な「聖」を感じ取り、また山に棲む「聖なる者」を知る民が尊敬・崇拜・畏怖していたのであろう。

逆に、人間の営みが容易な場所こそ「俗」であり、人間の営みがあるからこそ穢れているのである。里や村は「俗なる場所」であり、そこから人為的に一ランク落とされるのが古代からの民の社会ルールになっていたと思われる。

縄文時代末期から弥生時代にかけて、農耕が民の社会に必要な不可欠な生存のための仕事となった。農耕のためには肥沃な土地、豊富な水の近くに村社会が成立することが望ましく、そんな場所は取り合いになったはずだ。

蓄えとして穀物倉庫が安定や安心の象徴となり、大きく立派な穀物倉庫を持つ村が最も裕福な所だったはずだ。それを守護するため

には、少なくとも防衛力や外交力は不可欠だったろう。支配者たちは、相互に安全保障を考えたことだろう。最も指導力や統率力に優れた者が統一支配者となり、穀物倉庫は最も貴い建造物になったであろう。

伊勢神宮の内宮は古代の穀物倉庫の建物であることは明らかで、掘って建て柱の寿命を三十年と判断し、支障が出る前の二十年目で建て替えていたことは式年遷宮の根拠であろう。穀物倉庫に貴い神が宿る意味とは、「俗なる場所」だったはずの里や村の中に、最も貴い「聖なるもの」が存在するという立体的思考力を生み出している。

稲の神が農耕民の近くに居るのは自然なことであり、山の神とは別の存在だったことは理解しやすい。山の神とは、民にとって恐ろしい存在であり、その強さに守護を願う存在だったろう。

飛鳥や奈良の時代、仏教が朝廷や公家・武家の尊崇と信頼を集めていた頃を考えても、大陸支那の伝統的な思想を引いて、大寺院は平地に在りながら「山」を名乗っている。山が聖なる場所であり、修行は山でなければ成立しないからである。ところが、大寺院が平地にあることが当たり前になり、山の修験は異端とされ、その異端者は「結界の外」だと言われることが多かったようだ。結界の外にあるものは、魔物が天狗か知れないが、畏怖すべき力を持っていることは確実視されていた。

山にいる魔物や天狗は、神か仏か定かではないが、村に降りてきて悪事を働くことがないように祈り祭らねばならないことになっていた。里や村には神がおり、仏もいたはずだ。しかし、山を拝み祭ることで、村社会共同体は守られることになっていた。誰が守っていたのか？ それは山の神であり天狗であり結界の向こう側にいる山の衆だったろう。



最澄



空海

なっていたが、では、悪党の基本的な実体は何だったのか？ それを考える時に、最も良い資料のひとつだと思われるのが弘法大師に関する高野山大学の資料だ。

弘法大師空海は、讃岐の知事職の息子であり、それほどの地位でも富豪でもないが、唐に仏教を習得するために私費で二十年間も留学していたという。国費留学していた伝教大師最澄は、たった一年間しか予算が続かなかったという事実を考えれば、空海の財源は途方も無いものだったことが分かる。

唐から帰国した最澄は、首都の守りとして比叡山を与えられているが、密教伝承者である空海は天皇に願い出て高野山をもらい、首都近くには東寺を開くことでお茶を濁されたような形になっている。

高野山に寺院を建設する絵巻物があるが、寺院を作る前に僧たちが襷掛けでやっているのが「水銀の製鍊」である。つまり、高野山は水銀鉱脈の中心地だったのである。

「朱の一匁は金の一匁」の時代は古代から長く続いていたが、原料の水銀こそ富の象徴として存在していたのであろう。水銀は山でしか採取できず、鉱脈発見や採掘・製鍊は大陸の遙か西方の特殊技能である。それを日本に導入し、支配し、流通を司った者は誰か？ 改めて言う必要は無いだろう。

仏教だけでなく、キリスト教においても「最も恐れられた病気」とは、生きながらにして顔や体が崩れてゆく病氣、すなわち癩病（ハンセン病）と梅毒だったと思われる。悪魔が乗り移るから、生きながら顔や体が崩れてゆくのであり、神や仏では救済することも出来ない恐怖の病氣だったのだろう。

ところが、癩病も梅毒も水銀を使用することで症状が治癒すると言われている。数年後に水銀中毒で内臓や脳に異常が出て死亡しても、悪魔の病氣は平癒するのである。癩病や梅毒は宗教の敵であり、それをコントロールできる者たちも宗教の敵であつたろう。

ヨーロッパのジプシーの中枢をなすロマ人の伝承では、ジプシーは癩病を恐れなかったとされている。治療法を知っていたようだった。我が国でも、サンカと呼ばれる山の衆は癩病を恐がらず、懐に錢別を入れて捨てられる癩病患者を喜んで拾い、その金を受け取って連れ歩いたそうである。

鎌倉時代の末期になると、幕府の支配が全くと及ばない地方豪族が群雄割拠し始める。それらは悪党と呼ばれ、幕府が恐れる権力と

江戸時代になると、法華経が癩病や梅毒を「仏の敵」として成仏できないものと規定していたことに反発し、熊野信仰は水銀の治癒力と温泉の効能を高らかに宣伝して「小栗判官」の物語などを流行させた。

高野・熊野・吉野こそ、この世の陰と陽であり、役行者（えんのぎょうじゃ）が橋を架けると恐れられた場所である。修験の山であり、常民の近付けない山であり、最も聖なる山であることは何を意味するか。

修験の山は深く、山頂に清水が湧き、数億年前には海底だったものが隆起した所が多い。鉱物資源が豊富な山には、必ず共通項がある。そこを支配する者たちを天狗の一族と呼んだとしても、特殊技能は当時では超越した力だったことに疑いはないだろう。里や村では、強い天狗を味方につけて安全保障を図るのが安くて話である。

その山も、朝廷や公家の味方につく者や、武家の味方になって公



修験道の開祖とされる役小角

家を倒す者に分かれてネットワークが分断・独立することとなり、やがて「山は解放され、天狗の霊力は消え失せ、封印は解かれる」ことになる。天狗たち悪党のネットワークは各地に分散し定住し、伝統的な特殊技能や能力は全国各地に広がることになる。



我が国でエタと呼ばれるものは、古事記から伝わる「赤不浄、白不浄、黒不浄」に関係する職業のことである。つまり、血に関係する職業、出産に関係する職業、埋葬に関係する職業を代々務めている家柄がエタなのであり、やがてエタの職業部落が誕生して、発注量に従って規模などが変化している。

それらとは別に、奈良などの大寺院を本所とする散所が各地に存在していたが、そこに居住が許される者たちは概ね特殊技能の持主に限られた。散所には大寺院からの支配を証明する鑑札が出され、幕府や朝廷の支配を一切受けずに、全国各地に出入り自由の特権が与えられていた。東大寺や興福寺の権力が磐石だった頃の話であるが、山の天狗たちが散所に下りて来たのは確かだろう。

里を開いて農耕する一族も現われ、伊賀や甲賀には「忍び御用」を兼業する者たちが地域を形成している。武家につながる上忍、各地部落を管理する組頭の中忍、末端でラッパ、スッパ、トッパの仕事を請け負う下忍に分かれ、どんな客の注文にも応じる傭兵集団が完成する。

サンショ者と忍び者は使う技術が共通しているものが多い。出身が同じだという手かかりになろう。



「聖なるもの」の側にいる者たちは、神主、坊主、牧師、神父などのように、自らは決して「聖」ではないのに「聖の取次ぎ人」になる。「聖」の世話人であり、「聖」の代理人であるだろうが、それが体系的になれば組織が出来る。「俗なるもの」は決して「聖」になれることはなく、その側に行くことも至難の業である。その上「俗」より下に落とされる恐怖が付きまとい、還俗できない地獄や畜生に落とされることも「聖の側」が一方的に決める。「俗の罪」をご破産にできる免罪符を売りさばいていたのも「聖の側」である。

「南無阿弥陀仏と十回一息で唱えれば、経文一卷唱えるのと同じ」と貧困最下層の民衆に説いた「念仏踊り」も、「伊勢講の柄杓を御師から与えられたら、エタも伊勢参りが出来る」ところから始まった「ええじゃないか」も、「俗」から「聖」には決して昇れないと決められた宗教規則があったからだろう。

「聖」はいつの間にか「聖の側」の都合によって見栄えの良い軽い神輿となり、規則が組織を作って「聖の側」に序列を作り、「側」の者がありもしない「聖」を捏造する結果となっているものも散見される。

支配権力体制や宗教組織体制が価値観として確立する「聖」に対して、いつの時代も「俗」と蔑まれる者には「聖の側」の理論が押し付けられる。

これからの時代には、この今までの価値観も大きく変わらざるを得ないだろうが、基本的な歴史背景や闇とされたタブーの世界を知り、「神話的なもの」を押し付ける「権力側の自己肯定や保身に屈することなく、自由で幸福な知識と知恵を身につけたいものである。柔らかい脳味噌と、立体的な視野は必要不可欠の要素である。

おすすめ映画

傑作
ドキュメンタリー

「ウォーナーの謎のリスト」

「ウォーナー博士が京都を空襲から守った」とは、京都のお年寄りからよく聞く話である。事実かどうかは不明だが、ウォーナーという名前だけは広く知られている。

ウォーナーとは一体どんな人物か？ 彼は何をした人なのか？ そんな疑問を全て解決してくれるドキュメンタリー映画が作られた。金高謙二監督の傑作である。

我々はウォーナーを謎の人物と感じているのと同様に、東京では「神田の古本屋街を空襲から守ってくれたロシア人（エリセーエフ）がいた」という都市伝説があった。金高監督は、この二人に交流のあったことや、アメリカ政府やOSS（CIAの前身）との関係までも調べ上げて暴いている。膨大な資料に当たり、数十人の生き証人を取材して、この作品は「戦時中の秘密」を明らかにした。

八月十三日に金高監督から「ウォーナーもエリセーエフもヒーローではないと思います。実際に爆弾投下する軍人が、彼らの意見を採用したとは考えにくい」と筆者は聞いた。確かに、政府および大統領に「爆撃してはならない場所」が勧告されても、それが命令として空軍に通達させていた証拠がない以上、善意の解釈か悪意の解釈かで分かれるだろう。悪意の解釈とは、つまり「占領政策が執行し易いように宣伝工作をした」という論理である。



ウォーナー博士こと、ラングドン・ウォーナーは一八八一年生まれのアメリカ人で、祖父がハーバード大学創立者の一人だった。日本美術に傾倒し、来日して岡倉天心の弟子となる。数年間を日本において宗教美術の習得に費やし、帰国後はハーバードの東洋美術担当者になる。日本で出世の限界を感じて渡米した朝河貫一と連携し、日本で「守るべき美術価値」のリスト一五一箇所を作成する。

セルゲイ・エリセーエフは古文書の世界一の集積地である神田古本屋街を守るため、OSSと組んで空襲から保護せよと運動した。

文化財保護という側面があったかどうか不明であり、戦後占領政策のためのプロパガンダに利用されたのかも判然とせず、彼らの

活動が何だったのか解明は難しい。しかし、日米の直接戦争を止めさせようと手を回していたことは記録から事実だったと分かる。

北海道以外のほぼ全ての文化財を調査し、保護すべきものをリストアップしたウォーナーの努力は認めるが、その中の一〇%ほどは空襲を受けて破壊されている。軍需工場が近くになかった所でも、空襲を受けて破壊された所があるのを見れば、空軍の軍人がリストの存在を知っていたとは思えない。

金高監督は「ウォーナーがリストを作成して提出したことは事実だが、それは官僚の手から大統領にストリートに渡っていないのは確かだ」と言っていたが、我が国でも同様に、軍服や背広の余計な官僚たちが「国の将来」を誤らせたのだろう。それらが戦争責任を問われることは絶対に無いが。

本作品は日本のドキュメンタリー映画としては久々の大作である。金高監督はじめ製作に当たった方々の努力に敬意を表したい。

本部、地方本部活動報告

■本部、関東・東北本部

◇七月二十一日（金）

・午後六時より江東区東陽町において山口申先生勉強会。杉山副党首が出席。

◇七月二十六日（水）

・午後五時より、東京・多摩霊園にて党祖内田良平先生の墓参、清掃。内藤幹事長、山田関東本部副本部長、小田内陽太氏が出席。

◇八月十三日（日）

・東京・富岡八幡宮例大祭に鑑み、午後六時より山口申先生宅にてお祝い。杉山副党首が出席。

◇八月十五日（火）

・杉山副党首が靖国神社参拝。

◇九月十八日（月）・十九日（火）

・十八日午後三時より静岡県熱海温泉「古屋旅館」に於いて「日本を糺す会」。杉山副党首、内藤幹事長、山田関東本部副本部長が出席。

■関西本部

◇八月十八日（金）

・午後六時三十分より、尼崎市内において「むすびの集い勉強会」。出席者、党員党友他八名。テーマは「聖と俗について考える」他。